

# エスペラントの出勤形容詞の動詞活用をめぐる\* On deverbal adjectives conjugated as verbs in Esperanto

千田俊太郎  
TIDA Syuntarô

キーワード: エスペラント、派生形容詞、動詞活用

言語は、... 變遷、いな進化する。此の進化は宿命的である。其れに逆らふ言語はない。... 此の原理は <sup>ラング・アルテイフィシエル</sup> 人爲語 に於ても眞と認められる。成程、人爲語を創造した者は世に行はれぬ限り其れを掌中に収めて置く事が出来よう。けれども一旦その使命が果たされ、一般人の物となるや、統御力を失ふ。エスペラントはその適例である。エスペラントが成功した、したからとてこの宿命的法則を免れ得ようか。

(ド・ソッスユール 1928: 154)

## 1 はじめに

エスペラントは、現在おそらく最も活潑に使用されてゐる計画言語である。ただ、その使用状況を正確に把握することは極めて難しい。Simons and Fennig (2018) は Corsetti et al. (2004) に基づいて第一言語使用者を 1,000 人とし、Wandel (2015) に基づいて第二言語使用者を 2,000,000 とした上で全使用者を「2,001,000 人」としてゐる。ここでの問題は、単純な加算にのみあるのではない。情報をたどると、Corsetti et al. (2004) は「おそらく約 1000 家族が自身の言語の一つとしてエスペラントを使用」してをり「2000 人ほどの子供が含まれると想定しうる」として註に「この見積りは Saunders (1988) に見えるのが最初」とされてゐる。そこで Saunders (1988) をみると、「約 1000 家族」のエスペラント使用についての言及は見当たらず、“Renato Corsetti (personal communication)” の見積りでは約 200 家族が子供とのコミュニケーションにエスペラントを使用するとある。つまり情報の発信源は Corsetti の個人的な見積りと考へざるをえず、「家族」や「子供」=母語話者の数が引用されるたびに變はつてゐる。また Wandel (2015) はといふと、これまで提出された話者推計値が 10 万人から 1600 万人と大きく揺れること、Sidney S. Culbert の大規模なインタビュー調査 (出典なし) によれば 200 万人であることを紹介してをり、独自の調査としては Facebook の自己申告で 32 万人がエスペラント話者として登録してゐることを確認したもので、いくつかの想定を行なつた上で結論としてエスペラントに 200 万人の話者

---

\* 本稿は 2021 年 4 月 10 日 (土) 京都大學言語學懇話會第 114 回例會で発表した「エスペラントの派生動詞の興亡: -ebl-, -ind-, -ad-, 分詞」、及び 2021 年 4 月 15 日のコリアン・ラウンド・テーブル例會で発表した「에스페란토의 형용사 유래 동사에 대하여」(エスペラントの形容詞由來動詞について) をもとに話題を取捨し文章化したものである。コメントをくださった方々に感謝する。また、全體の趣旨は異なるものの、論點と例示の一部は「都区内エスペラント会連絡会」主催の第 38 回講演會「言語の壁を超えた言語の發展」と同じものを使用してをり、講演會記録を千田 (2022) として別途まとめた経緯があることをおことわりしておきたい。本稿の一部は JSPS 科研費 17H02333, 18K00533, 19KK0012, 19K00618 の成果を含む。

があるとするに矛盾がないといふ謙虚な主張を示したものである。

フェルディナン・ド・ソシュールの弟のルネは熱心なエスペランティストで、エスペラント界では学術的なエスペラント研究を始めた人として知られてゐる。ルネがエスペラント界に入り浸るやうになつたのは、ジュネーブで開催された 1906 年世界大會に参加して以降であるが、このきっかけを作つたのはフェルディナンで、エスペラントに関心を持ちながら誤解を受けることを恐れたフェルディナンが自分の代わりにルネに大會の觀察を依頼したものと見られてゐる (Künzli 2001)。特定計劃言語の支持者と見られたくなかつたのであらう。フェルディナンがその「講義」の中でこの「人為語」に豫測すべき歴史變化に觸れてゐたことが『一般言語學講義』などから知られてゐるが、エスペラントが言語として生き始めてゐるといふ情報は弟からのものだつた可能性が高い。すでに百数十年の歴史をもつエスペラントは、フェルディナンのいふ通りに變化してゐるだらうか。

エスペラントの言語變化については早稲田 (1983: 61) に、「一般に言語變化は音韻論、形態論、意味論、語彙などの領域に区分されるが、エスペラントのそれは主として意味論と語彙の分野に限られてゐる」といふ發言がある。

たしかに體系的な音變化の事實は管見の限り確認されてゐない。しかし、今後その可能性が全くないともいへない。エスペラントは 23 個の子音音素と 5 つの母音音素をもち、強勢は辨別的ではなく、必ず語の次末音節に落ちる。特徴的な補助記號付きの字を音素のリストとともに下にまとめておく。以下、本稿では例を提示する際、エスペラントの正書法を使用する。

- (1) a. 子音音素 23: /p, b, m, f, v, u̥, t, d, n, s, z, ts, r, l, ʃ, ʒ, tʃ, dʒ, j, k, g, x, h/  
b. 母音音素 5: /a, e, i, o, u/  
c. 表記: c /ts/, ĉ /tʃ/, ĝ /dʒ/, ĥ /x/, ĵ /ʒ/, ŝ /ʃ/, ŭ /u̥/

細かなことを言へば古典的な問題に dz (c に對應する有聲音で二字で表記される) や二重母音、長子音の扱ひなどがあり、音素分析にしても専門家の見解が一つにまとまるべくもないが\*1、ここでは歴史的變化との關聯で注目すべき ĥ についてのみ一言を加へたい。

ĥ を含む語は設計時から頻度が低く、初期の段階から次のやうに代替語形の使用が優勢になつた結果、現在では ĥ の頻度はさらに低くなつてきてゐる (Wennergren 2020: §2.1)。

- (2) a. ĥemio → kemio 「化學」  
b. ĥino → ĉino 「中國人」  
c. ĥoro → koruso 「合唱(團)」

かうした語形の代替がかりに更に進むとすれば、ĥ は歴史的な文書にしか残らずに音素としては消滅することになる。つまりある種の語彙の變化は音韻體系の變化につながる。

\*1 van Oostendorp (1999) はこれらの點を含めた音韻的解釋について音配列と音節構造の觀點から論じてゐる。そのほか安達 (1984) は聲門閉鎖音を音素として認める可能性を示してゐる。

それでは文法変化は、といふ問ひが残る。本稿では文法変化として扱ふことができさうな現象として、形容詞語幹に動詞語尾がつく、つまり、いはば形容詞が動詞活用する例に注目し、特に後半では動詞由来の派生形容詞語幹を扱ふ。歴史変化の様子を辿るために主としてエスペラントのコーパス La Tekstaro de Esperanto\*2 (以下 TE) を使用する。

圖 1 に結論から示す。接尾辭-ebl-(... 可能な), -ind-(... するに値する), -ant-/-int-/ont-(分詞語幹現在/過去/未來) は、動詞語幹について形容詞語幹を派生するやうに設計され、實際にそのやうにも運用されてゐるが、これらの接尾辭がついてゐるにもかかわらず動詞活用する例が増えてゐる。動詞活用する割合は特に接尾辭-ebl-のついた語幹 (以下「-ebl-語幹」) をもつ語では高い。これを、動詞語幹について繼續性を表はす派生動詞を作るやうに設計された接尾辭 -ad- と比べると興味深いことが分かる。接尾辭 -ad- が、かなり初期の段階でその主たる機能を名詞派生に變へていつたことは知られてをり、すでに de Saussure (1915: 18) がこの接尾辭を動作的な觀念を表はす名詞化標識として扱つてゐる。コーパスを調べてみると、實際に-ad-語幹をもつ語が動詞活用する例は年々減つてきてゐる。さらに、-ebl-語幹に動詞語尾がつく例が年々多くなつてをり、1990 年前後には-ad-語幹よりも-ebl-語幹の方が動詞として振る舞ふ割合が多くなつてゐる。

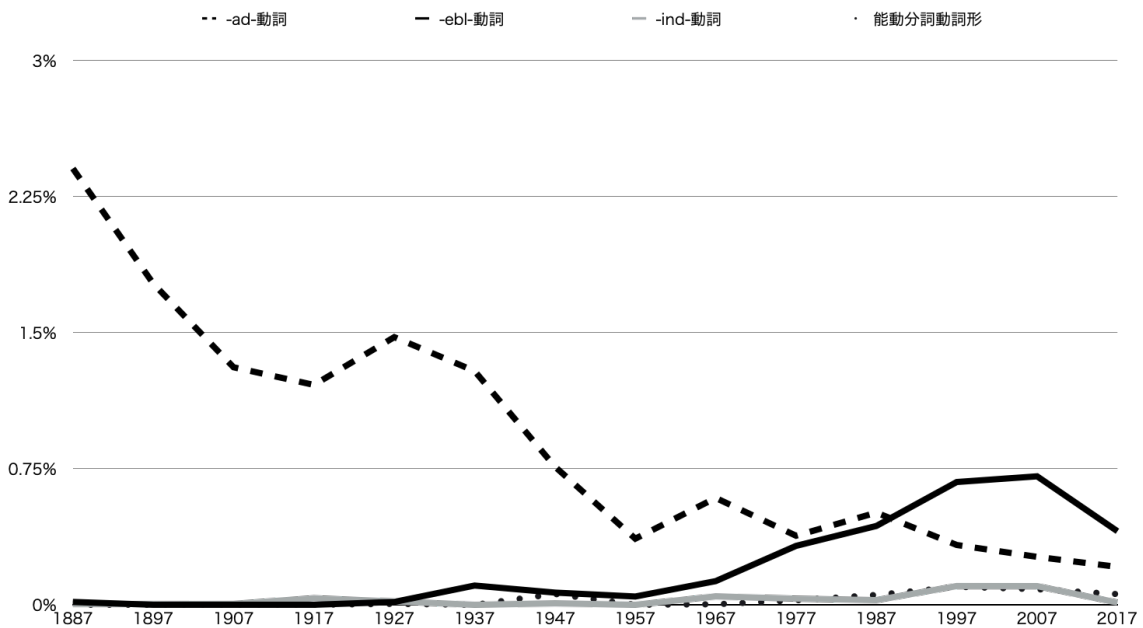


圖 1 動詞語形全體のうちに占める派生動詞語幹 X-ad-, X-ebl-, X-ind-, X-a/i/ont- の割合 (TE)

以下、本稿では §2 でザメンホフのエスペラント表現、文體及び、彼の言語に對する態度を言語變化の觀點から紹介し、§3 で形容詞語幹の動詞活用を、§4 で出動形容詞語幹の動詞活用を、§5 で分詞語幹の動詞活用を順に扱ふ。§6 は結語である。

\*2 <https://tekstaro.com/>。このコーパスはオンラインで検索することもできるが、検索結果の表示數に制限があるため、ダウンロード可能なデータ群を使用した。本稿で提示するのはファイル名に 2020-10-18 の日付が入つたもので、形態素境界の付されたデータに對して ruby などのツールを使ひ検索・集計した結果をグラフにまとめたものである。なほ、ダウンロード可能なデータは著作権の關係でオンライン版とはデータに若干の異同がある。

## 2 ザメンホフとエスペラントの變化

エスペラントの創始者ザメンホフのエスペラント文體は、典型的に初期のエスペラントの特徴を示し、またザメンホフ自身がエスペラントの言語變化を體感してゐた。次の(3a)はエスペラントを紹介した初めての書籍(通稱『第一書』)に付された切り取つて送付するための署名欄表面の文言(pp.31, 33)であり\*3、(3b)はこれがプリアーの『エスペラントの歴史』に引用された際のバージョンである。

- (3) a. *Mi, sub-skrib-it-a, promes-as el-lern-i la*  
 1.SG 下-書-PST.PASS.PTCP-ADJ.SG 約束-V.PRES.IND 出-學-V.INF DEF  
*propon-it-a-n de d[okto]r-o Esper-ant-o*  
 提案-PST.PASS.PTCP-ADJ.SG-ACC by 博士-N.SG 希望-PRES.ACT.PTCP-N.SG  
*lingv-o-n inter-naci-a-n, se est-os montr-it-a,*  
 言語-N.SG-ACC 間-國-ADJ.SG-ACC if COP-V.FUT.IND 示-PST.PASS.PTCP-ADJ.SG  
*ke dek milion-o-j person-o-j don-is publik-e tia-n*  
 COMP 十 百萬-N-PL 人-N-PL 與-V.PST.IND 公-ADV 如是.ADJ.SG-ACC  
*sam-a-n promes-o-n.*  
 同-ADJ.SG-ACC 約束-N.SG-ACC

(下に)署名されたところの私は、もし一千万人がかかる同じ約束を公に行なつたことが示された場合には、希望者博士により提案された國際語を習得することを約束します。 — *Meždunarodnyj Jazyk*", Zamenhof, 1887

- b. *Mi, sub-skrib-int-a, promes-as, ke mi*  
 1.SG 下-書-PST.ACT.PTCP-ADJ.SG 約束-V.PRES.IND COMP 1.SG  
*lern-os la lingv-o-n inter-naci-a-n de D[okto]r-o*  
 學-V.FUT.IND DEF 言語-N.SG-ACC 間-國-ADJ.SG-ACC of 博士-N.SG  
*Esper-ant-o, se est-os montr-it-e, ke*  
 希望-PRES.ACT.PTCP-N.SG if COP-V.FUT.IND 示-PST.PASS.PTCP-ADV COMP  
*dek milion-o-j da person-o-j sub-skrib-is tiu-n sam-a-n*  
 十 百萬-N-PL of 人-N-PL 下-書-V.PST.IND この.SG-ACC 同-ADJ.SG-ACC  
*promes-o-n.*  
 約束-N.SG-ACC

(下に)署名するところの私は、もし一千万の人がこの同じ約束に署名したことが示された場合には、希望者博士の國際語を學ぶことを約束します。

(Privat 1927: 32-33)

\*3 アスタリスクなど一部表記を修正し改めてハイフンによる形態素境界を付してある。以下例文の提示では一部の表記を統一してあり、ザメンホフの形態意識とは異なる分析も含まれる。

『第一書』にまで遡ると、初期のエスペラントといふよりもザメンホフ自身の文體が安定する前ともいふべきかもしれない。プリヴァーは『第一書』に限らず初期のエスペラントの書き物を引用する際に手を入れたバージョンを示すことが多いが、ここではさまざまな修正が入つてゐる。文法的な修正點として分かりやすいもの（下線部）をあげると、第一に補文標識 *ke* 以下からなる補文が主語の受動文があるが、受動分詞形容詞形 *montrita* が副詞形 *montrite* に書き換へられてゐる。現在の慣用ではここは副詞形でないといかにもをかしい。また名詞形數表現の *milionoj* を主要部とする句 *dek milionoj* の後に前置詞 *da* が加へられてゐる。名詞形數表現が直接名詞句を修飾することは現在では見られないため、プリヴァーによる修正は現代エスペラントからみてもほとんど必須の修正だといへる。

さて、エスペラント史において非常に重要な人物にグラボフスキ (Antoni Grabowski, 1857–1921) といふポリグロットがゐる。Kökény and Bleier (1933: 325) によると、シュライヤーの世界語思想に感銘を受けたグラボフスキはヴォラピュクを習得し作成者を訪問するが、シュライヤー自身が流暢な話者でないことを知つてしまふ。その後、グラボフスキが『第一書』出版の年にエスペラントを習得し創始者ザメンホフを訪問すると、この新言語による會話が成立する。これが初のエスペラント會話とされてゐる。かうして實際に世に行はれ始めたエスペラントは、いはばザメンホフの掌中から飛び出してゆく。

次の (4a) は通稱『第二書』と呼ばれるザメンホフの初期エスペラント著作の有名なくだりであるが、ザメンホフの使用した「創始者」のエスペラント表現 *iniciatoro* は、プリヴァーのザメンホフの傳記の中で *iniciatinto* と言ひ換へられ、引用符がつけられてゐる。

- (4) a. *Mi ne vol-as est-i kre-int-o de l' lingvo-*,  
 1.SG NEG 欲-V.PRES.IND COP-INF 創-PST.ACT.PTCP-N.SG of DEF 言語-N.SG  
*mi vol-as nur est-i iniciator-o.*  
 1.SG 欲-V.PRES.IND 只 COP-V.INF 創始者-N.SG

私はこの言語の創造者でありたくはありません。私はただ創始者 (*iniciatoro*) でありたいのです。 — TE, *Dua Libro de l' lingvo Internacia*, Zamenhof, 1888

- b. *Dum ĉiam modest-e la "iniciat-int-o" de Esperant-o ...*  
 while 常に 謙虛-ADV DEF 創始-PST.ACT.PTCP-N.SG of エスペラント-N.SG

常に謙虛にもエスペラントの「創始者」(*iniciatinto*) であつた彼は...

— TE, *Vivo de Zamenhof*, Privat, 1920

『第二書』に見られる *iniciatoro* の語幹 *iniciator-* はエスペラントとしては複合形式として分析しにくい。前部要素は動詞語幹 *iniciat-* (創始する) で問題なささうにも見えるが、後部要素を接尾辭 *-or-* と見るのは共時的には難しく、*redakt-or-o* (編輯者) など平行例に見えるものがないわけではないが、これらは生産的な形態素ではなく、どちらかといへば語源的な單位といふべきである。現在使はれるエスペラントは初期のエスペラントに比べ、形態的に透明な表現を好む傾向があり、動詞 *iniciat-i* の語幹から過去能動分詞名詞形 *iniciat-int-o* を派生するのはまさにそのやうな傾向に合致する。先の點とも合はせて考えると、『第一書』や『第二書』からの 40 年のエスペラントの變化が、プリヴァーの時代か

ら現在までのエスペラントに比べて激しかつたことを窺はせるものである。

その後、1905年に「その誤謬をも含め、厳として觸るべからざる (netuŝebla) もの」(Dietterle 1929: 45) と言はれる「エスペラントの基礎」(文法、語彙、練習問題(例文)のセット)が定められ、これがエスペラントに歴史的安定性を與へたと言はれる(佐々木 2009)。早稲田(1983)がエスペラントの言語變化に音韻・文法を含めないのは「基礎」の部分に注目したものであり、こと文法に関しては「基礎」で充分だと考へる立場であらう。しかし、「基礎」の文法は、連番の付け方などに異同が認められるにしても、基本的に『第一書』に含まれる短い十六箇條のものにすぎない。そのうち用法の定めのない前置詞 *je* と、使はなくてもよいとされる定冠詞 *la* に関する二つの條目はあくまで設計時のものであり、その後の慣用を反映してはゐない。もちろん十六箇條文法には先に見た形容詞形と副詞形の使ひ分けや數表現と前置詞の關係などの話は一切出てこないが、かうした表現の慣用パタンの違ひが時代の推移に伴つて認められるのであれば、これを文法の變化と考へてもいいのではないか。

ザメンホフも變化に氣づきつつ基本的には初期のエスペラントとその後のエスペラントが異なるものではないといふ趣旨の發言をしてゐる。次は1908年ドレスデン大會での演説からの抜萃である。

- (5) 我々の言語そのものもより豊かに、彈力的になつていつてゐます。少しづつ、絶えることなく、新たな單語と形式が現はれ、あるものは堅固になり、あるものは使はれなくなつてゐます。全ては靜かに、搖らぐことなく、氣付かれさへしえぬうちに起こつてゐます。住むところが互ひに大いに遠いにも拘らず、異なる土地ごとの我々の言語のなんらの分化も確認されるどころはなく、著述家たちが熟練を重ねるにつれ、我々の言語を使ふしかたは互ひにより似かよつてきてゐます。どこにあつても、古い言語と新しい言語の間の連續性が斷絶したり損なはれたりしてはをらず、我々の言語がしつかり發展していつてゐるにも拘らず、全ての新たなエスペランティストが20年前の著作を、當時のエスペランティストと同様、完全にらくらくと讀んでゐます。これらの著作が今書かれたのではなく、我々の言語が乳飲み子であつた最初期に書かれたものであることに氣付きさへしないのです。

(ザメンホフ、1908年ドレスデン大會演説、Dietterle 1929: 387)\*<sup>4</sup>

この演説を聞いた新村出は「Zamenhofの演説はよくわかりました。Zamenhofは万事ひかえ目な上品なおんとうな人柄で、人におしつけるというような態度ではありませんでした。」(新村 1972: 335)と感想を述べてゐる。これまで見てきたザメンホフのエスペラントに對する態度を振り返れば、ある意味では民主的な言語の發展を希望してゐたことが分かり、また實際に『第一書』、『第二書』におけるザメンホフの文體、表現にはその後踏襲されてゐない部分が多々含まれてゐる。

\*<sup>4</sup> 1908年ドレスデン大會演説はザメンホフ(1997: 237-251)に邦譯があり、この部分はp.245に譯出されてゐる。本稿では譯語のアイデアを若干借りつつ、なるべく字句通りになるやうに新たに譯し直してある。

### 3 形容詞語幹の動詞活用

ザメンホフとエスペラントによる最初の會話を成立させたグラボフスキは、その後活潑なエスペラント使用を続け、その實驗的詩作(主として譯業)の中に多くの新しいエスペラント表現を生み出した。Kalocsay (1970: 63-64) は特徴的なグラボフスキ語法を 11 に分類してゐるが、本稿に關はるのは次の二點である。

#### (6) Kalocsay (1970: 63-64)

- a. 2. 形容詞の直接的動詞化: *sobr-i*(素面-V.INF), *prudent-i*(慎重-V.INF), *jun-i*(若い-V.INF), *pret-i*(準備済-V.INF), *pal-i*(青ざめた-V.INF), *modest-i*(謙虚-V.INF), *fort-i*(強い-V.INF), *ali-i*(別-V.INF)
- b. 3. 分詞(これも形容詞)の直接的動詞化: *mal-permes-it-as*(不許-PST.PASS.PTCP-V.PRES.IND)「禁止されてゐる」, *nom-at-is*(稱-PRES.PASS.PTCP-V.PST.IND)「呼ばれてゐた」, *laŭd-at-u*(讚-PRES.PASS.PTCP-V.IMP)「褒めたたへられよ、褒めたたへられるべきだ」

第一點の「形容詞の直接動詞化」の前提として、エスペラントの語幹には品詞性が備はつてゐるといふ考へ方がある。設計時の語根ごとの品詞については、「基礎」の「語彙」(Universala Vortaro)の五言語(佛、英、獨、露、波)による譯語の品詞がほとんど揃へられてゐることによつて知ることができる。「基礎」の「語彙」は基本的に語根のリストであり、見出し語には品詞語尾が付いてゐない點でのちによく行なはれる語彙の提示法とは異なるが、意圖された品詞があることは明らかである\*5。運用のされ方としても、de Saussure (1915)がその著作全體で示したやうに、品詞を變へるやうな形態法(接辭付加や品詞轉換)の仕組を見ると、語幹固有の(おほもとを辿れば語根固有の)品詞性を想定せずに派生の諸制約を捉へることはできない。それぞれの語彙項目が実際にどのやうな品詞語尾とともに使はれる傾向があるのか、コーパスなどの資料によつて頻度を見ることができるとは、本稿でいくつか例を取り上げる通り、派生の仕組から想定される語幹ごとの品詞は、実際に使はれる語幹と品詞語尾の結合頻度と強い相關をもつてゐる。かうした語幹ごとの品詞性自體に關しては、設計と運用にそれほど大きな隔たりはない。

形容詞語幹の動詞活用は、ごく大まかに言へば年を追ふにつれ増えてゐるが、語幹によつてその生起頻度にかなり差がある。「基礎」の「語彙」に形容詞譯語が使はれてゐる四つの語幹を取り上げたい。*simil-*「似」と *prav-*「正」はザメンホフの用例にも動詞語形があり、特に *simil-*の動詞としての用法は豊富に見られる。一方で *grav-*「重要」と *nov-*「新」

\*5 エスペラントの一語幹表現に對する五言語の譯語がほとんど一語であてられることや、それぞれの言語における品詞がほとんど一致してしまふことは、言ふまでもなく、ヨーロッパの印歐語の類型的齊一性(多様性の低さ)を示してゐる。同じ意味を表はす表現がどの言語をとつても一語で表現可能であり、しかも非常に似通つた品詞體系の中の對應する品詞に所屬するなどといふことは、世界の言語をランダムに五つ選んで 3,000 弱の語彙リストを作る場合にありうることではない。特に「形容詞」について、エスペラントのヨーロッパ性が際立つて見られることは、Tida (2021a) で日本語、朝鮮語、ドム語、トク・ピシンの對照を通じて示したところである。

についてはコーパスで見る限りザメンホフの用例に動詞語形が見当たらない。現代に至つて simil-「似」、prav-「正」は動詞活用の例が増えてをり、grav-「重要」も動詞活用が行なはれるやうになつてゐるが、nov-「新」は動詞活用の例があるにはあるもののいまだに稀である。現在エスペラント界で最大規模の、また最も権威ある辞書である Plena Ilustrita Vortaro (以下 PIV)\*6はこの状況を反映してをり、四つの語幹の主たる見出し形は全て形容詞として項目を作つてゐるが、simil-, prav-, grav-については動詞形の見出しを項目内に置いてある。エスペラントにおいても使用実態に応じて規範が更新されるわけである。表 1 にこの関係をまとめておく。

表 1 形容詞語幹の動詞活用、標準性

	Universala Vortaro	Zamenhof の動詞語形用例	PIV 2020
simil-	「似」 形容詞譯語	豊富	形容詞見出し、動詞小見出しあり
prav-	「正」 形容詞譯語	少数	形容詞見出し、動詞小見出しあり
grav-	「重要」 形容詞譯語	なし	形容詞見出し、動詞小見出しあり
nov-	「新」 形容詞譯語	なし	形容詞見出し、動詞小見出しなし

これらの形容詞語幹がどのように使はれてきたか、コーパスを利用すればもう少し具体的に示すことができる。圖 2, 3, 4, 5 は TE の検索結果から年代別にそれぞれの語幹が形容詞語形と動詞語形で使はれた比率\*7をまとめたものである。

四つの語幹のコーパス調査結果について、いくつかの点を確認する。まづコーパス (TE) の特徴であるが、ザメンホフの作品は非常に多く集められてをり、相当網羅されてゐると

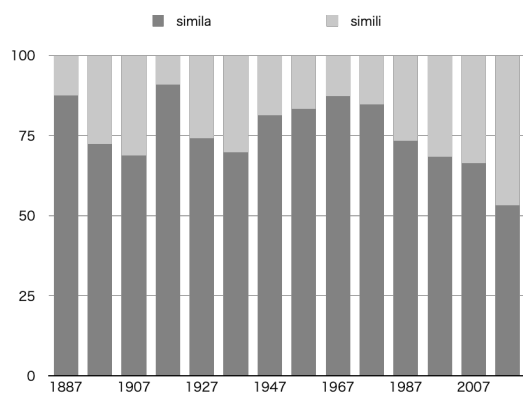


圖 2 simila/simili 比率

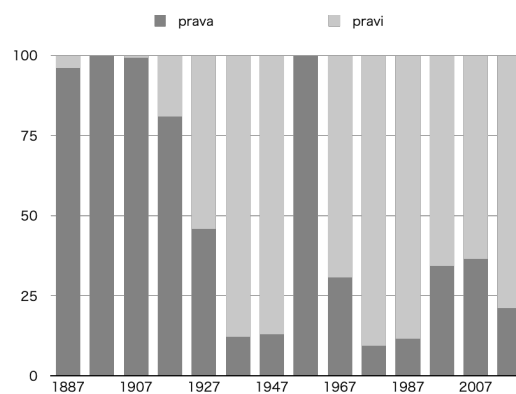


圖 3 prava/pravi 比率

\*6 筆者が使用したのはオンライン版の PIV 2020(<https://vortaro.net/>) である。

\*7 形容詞語形と動詞語形以外に名詞語形、副詞語形で使はれる場合があるが、ここでは形容詞語形と動詞語形が生じた数を全體とした比率を示した。キャプションの simila/simili などは語幹 simil-などの形容詞形/動詞形を意味し、形容詞単数主格語尾の-a と動詞不定詞語尾の-i を添へてあるが、検索対象は全ての形容詞語形、動詞語形である。



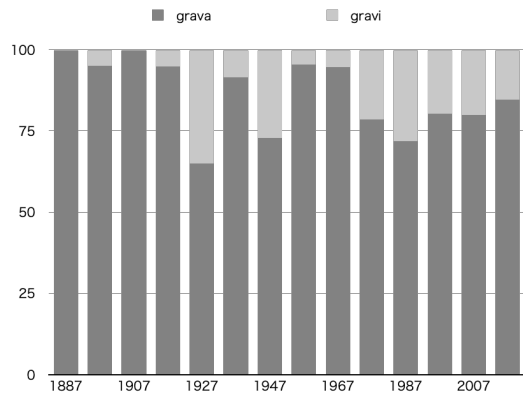


圖 4 grava/gravi 比率

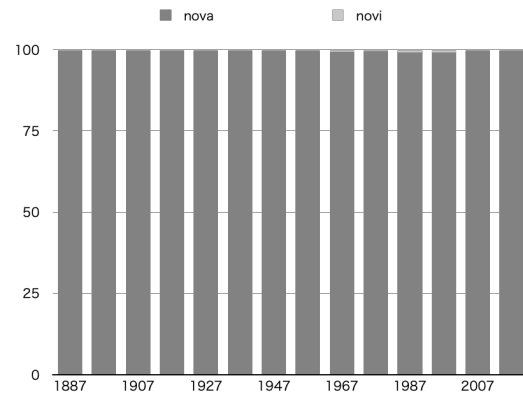


圖 5 nova/novi 比率

みて良ささうであるが、他のものについては分野や作者による収録様相はまちまちで、「均衡コーパス」のやうな品質・分量には至つてゐない。形態素境界の品質はそれなりに利用できる程度で、固有名詞を始めとした外來綴りなどで多くのミスがあることを見れば機械処理の仕方がある程度見えるやうなものである。データ内に発表年代がある程度特定できる情報が書き込んであり、機械的に取得できた限りにおいて、エスペラントが創出された1887年から10年ごとに集計する方法を取つたが、このうち発表年代が若干不正確にしか得られないものもある。例へば雑誌 *Le Monde diplomatique* (のエスペラント版) の記事の2005年から2007年までのデータについては、全てが一つのファイルに収録されてゐるが、記事ごとの発表年月日記載がないためすべて1997年からの十年間のものとして数へた。また、1957年からの十年についてはデータ数が極端に少なく、例へば圖3のグラフでは、その年代のデータで語幹 *prav-* が一件のみヒットしてそれが形容詞語形であつたことを反映してゐる。

検索ではデータに含まれる形態素境界と語末いかんについては検索式で参照してゐるが、語頭の形式は参照してゐない。反対語を形成する接頭辭 *mal-* などがついた派生語が結果には含まれてゐるが、基本的には語根と同類の形容詞語幹を作るものしか拾はないはずである。データには誤つて付された (あるいは意圖不明の) 形態素境界があり、例へば *nov-* の動詞語形をねらつて得られた検索結果には実際には *nov-* の語形でないものが含まれる。全體を目視で確認する時間的餘裕がないため、これらはコーパス利用の限界と考へて誤つた結果も件数に含めてゐる。

以上のやうな事情はあるものの、コーパス結果で分かることも多い。最初期から動詞活用が一定数あるものが現代でも動詞活用しやすいこと、語彙によつて變化の激しさも異なり、*prav-* の動詞活用率は形容詞活用率を上回つてきてゐること、一方で *nov-* の動詞活用率は今でもかなり稀であることなどが、數値で示せるやうになる。ただし、*nov-* が動詞語形で現れることが全くないわけではないことにも注意しなければならない。次の例はともに同じウェブページに見られる語幹 *nov-* の用例だが、(7a) は形容詞語形、(7b) は動詞語形が使はれてゐる。

- (7) a. *Nov-a ESF Blog-o*  
 新-ADJ.SG ESF ブログ-N.SG

新しいESF(エスペラント研究財團)のブログ

- b. *Kio nov-as?*  
 何 新-V.PRES.IND

何が新しいか(新着記事一覧ボタン)

— <https://www.esperantic.org/eo/hejmo/> accessed 2021-03-30

一部の形容詞語幹がどうして動詞活用をするようになってきたのか、変化の要因についてはいくつか考へられる背景がある。形容詞、動詞に限らず品詞轉換が盛んに行なはれるといふエスペラントの性格が形容詞語幹の動詞活用を可能にする大前提になる。そして、そもそも、形容詞の中にはコピュラ動詞を伴って状態述語を構成する頻度の高いものと低いものがあり、状態述語を構成しやすい形容詞から動詞活用になつてゐることも想像に難くない\*8。このやうな場合、短い語形は經濟性に優れてゐる。もう一つ考へられるのは、コピュラ動詞を含む状態述語内で使はれる補語が形容詞形と副詞形の交替を見せる現象を背景としたなんらかの変化である。このことについて少し詳しくみたい。

Piron (1977: 25) はエスペラントに見られる状態補語の形容詞形・副詞形の交替をエスペラントのスラブ的特徴の一つであるとして、次の例を擧げてゐる。

- (8) a. *labor-o est-as neces-a*  
 仕事-N.SG COP-V.PRES.IND 必要-ADJ.SG

仕事が必要だ。

- b. *labor-i est-as neces-e*  
 仕事-V.INF COP-V.PRES.IND 必要-ADV

仕事することが必要だ。

(Piron 1977: 25)

名詞を主要部とする名詞句が主語にある場合には状態補語は形容詞形を取るが(8a)、主語がない場合や、主語が不定詞句や補文である場合には状態補語は副詞形で現れる(8b)。この振る舞ひは、受動文(3b)でも同じだが、先に見た通り、『第一書』(3a)よりのちに生まれた慣用であり、設計されたものではなく實踐が生んだパターンであることにも氣をつけた。Piron (1977: 25) や Kolker (1985: 115) が言ふやうにこれがスラブ語、あるいはより具體的にロシア語からの影響であるとすれば、そしてヨーロッパ諸語との接觸から大きな影響を受けた(後藤 1987) エスペラントの接觸言語としての側面を捉へるとすれば、ひよつとするとエスペラントの基層にロシア語を据ゑる構圖の根據の一つにもなる。

ところで、de Saussure (1915: 18) が言ふやうに動詞不定法語尾の-i と派生接尾辭-ad-が

\*8 Gledhill (1998: 52) は動詞活用しやすい形容詞語幹をあげてゐる。かうした情報は今後それぞれの語彙の用法史を明らかにするのに有用である。

同義形式であるとする、次の (9) は (8b) と同義といふことになるが、状態補語につく品詞語尾は異なるものが要求される。

- (9) *labor-ad-o*            *est-as*            *neces-a*  
 仕事-ACNNR-N.SG COP-V.PRES.IND 必要-ADJ.SG

仕事すること (労働) が必要だ。

単純動詞が述語になる文では主語の種類による文法上の区別は生じない (10)。

- (10) *labor-o/labor-i/labor-ad-o*            *neces-as*  
 仕事-N.SG/仕事-V.INF/仕事-ACNNR-N.SG 必要-V.PRES.IND

仕事 (すること) が必要だ。

コーパスで確認すると、形態素 *neces-* の場合に特にはつきりと、形容詞形や副詞形がコンピュータ動詞に隣接する頻度が年を追ふごとに低くなり、それに伴って動詞形が増えてみるといふ関係を見て取ることができる。図 6 は形態素 *neces-* (必要) を含む語の生起数を

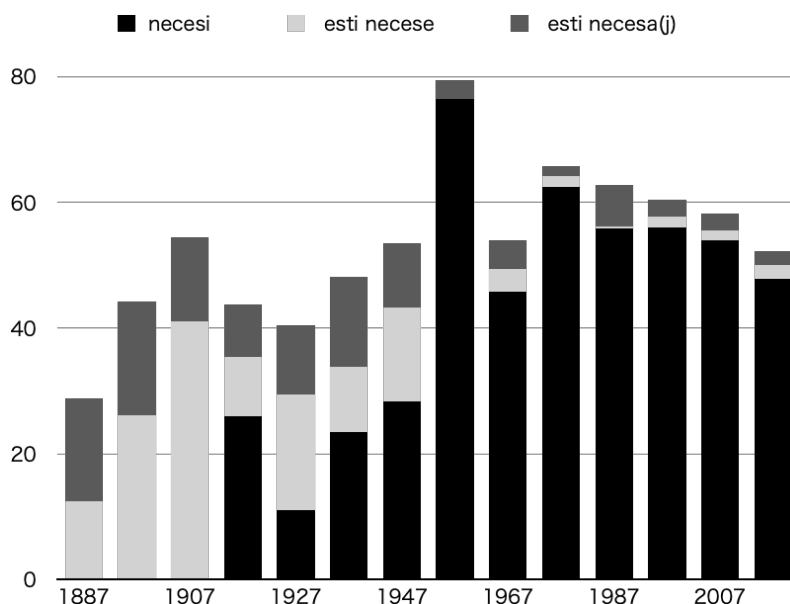


図 6 形態素 *neces-* を含む語のうち動詞形、コンピュータ動詞隣接副詞形、同形容詞形の割合

100 として、そのうち動詞形で現はれたもの (圖中の *necesi*)、コンピュータ動詞に隣接して副詞形で現はれたもの (*esti necese*)、コンピュータ動詞に隣接して形容詞形で現はれたもの (*esti necesa(j)*) の生起頻度を百分率で示した年代ごとのグラフである\*<sup>9</sup>。

\*<sup>9</sup> 副詞形や形容詞形とコンピュータ動詞とが隣接する (前あるいは後ろにある) ものを検索した結果については、実際に二つの要素が実際に述語を構成してゐるかどうかは保証されてゐない。形容詞形はコンピュータ動詞に隣接して述語を構成する場合には主格形しか使はれないので對格形の数を排除した。他のグラフ (例へば圖 2) では形容詞形の検索対象に對格形を含めた全體を示した場合がある。

以上からすると、形容詞が動詞活用するやうに變化してゐる背景に、ある種の機能的な要因がはたらいてゐる可能性がある。すでに確立した慣用を破ることなく、述語形式の煩雜な形態統語操作を避けるための意識的な語形選擇も行なはれてゐるかもしれない。結果として、エスペラントが初期に經驗したスラブ化から脱却する方向にあたるやうにも見える變化が起こつてゐる。

#### 4 出動形容詞語幹の動詞活用

エスペラントには動詞語幹から形容詞語幹を作る生産的な接尾辭に *-ebl-*, *-ind-*, *-em-* があ  
り、これらに加へ、分詞語幹も同類とみることができ。これらの派生語幹は動詞からわ  
ざわざ形容詞語幹として派生したにも關はず、動詞活用をする點で特異である。ここ  
では *-ebl-* に關する語形の動詞活用をみたい。接尾辭としての *-ebl-* は動詞語幹から形容詞語幹  
を作る。

(11) *vid-i* 「見る (見える)」 → *vid-ebl-a* 「見える (見ることができる)」

先に見た通り、エスペラントにおいては形容詞形と副詞形が極めて形式的な形態統語交替  
に従ふ。これは *-ebl-* 語幹でも同様で、コピュラ動詞とともに述語を構成する場合、状態補  
語は形容詞形で現はれたり (12a)、副詞形で現はれたりする (12b)。

(12) a. ... *ne est-as vid-ebl-a iu.*  
NEG COP-V.PRES.IND 見-可-ADJ.SG INDEF.COR.SG

... 誰も見えない\*<sup>10</sup>。

— TE, *Robinsono Kruso*, Krafft, 1908

b. ... *est-as vid-ebl-e, ke vi est-as tre saĝ-a,*  
COP-V.PRES.IND 見-可-ADV COMP 2 COP-V.PRES.IND とても 賢-ADJ.SG  
...

... あなたがとても賢いことは明らかだ (が...)

— TE, *La Ondo de Esperanto*, diversaj personoj, 2001-2004

エスペラントで一般的に見られるやうに、接尾辭 *-ebl-* は單獨で品詞語尾を伴つて自立語  
を形成することがある。次は、語幹 *ebl-* がコピュラ動詞とともに述語を構成しながら、形  
容詞形 *ebla* で現はれた状態補語 (13a) と、副詞形 *eble* で現はれた状態補語 (13b) の例で  
ある。

(13) a. *La am-o inter ni ne est-as ebl-a.*  
DEF 愛-N.SG 間 1.PL NEG COP-V.PRES.IND 可-ADJ.SG

我々の間には愛はありえない。

— TE, *Artikoloj el Monato*, diversaj personoj, 1997-2003

\*<sup>10</sup> *iu* 「誰か」は「相關詞」と呼ばれる語類に屬し、修飾する形容詞句は通常後に來る (Jansen 2008: 25-26)。そのためここでは「見える誰かがゐない」の解釋は取りづらい。

- b. *Ne est-as ebl-e far-i kompar-o-n inter ĉeval-o kaj*  
 NEG COP-V.PRES.IND 可-ADV 作-V.INF 比較-N.SG-ACC 間 馬-N.SG and  
*bov-o...*  
 牛-N.SG

馬と牛とを比較することは可能ではない。

— TE, *Kompatinda Klem*, John Merchant., 1931

(14) に示すやうに、接尾辭-ebl-を含む形容詞語幹も、自立語を作る語幹 ebl-も、動詞活用をすることがある。

- (14) a. *vid-ebl-as ilia-j mal-dik-a-j korp-o-j tra la*  
 見-可-V.PRES.IND 彼等の.ADJ-PL 非-肥-ADJ-PL 體-N-PL through DEF  
*mizer-a-j vest-aĵ-o-j.*  
 粗末-ADJ-PL 衣-物-N-PL

粗末な衣服越しに彼らの瘦せた體が見える。

— TE, *Vojaĝimpresoj*, Langlet/Luin, 1895 (2003)

- b. ... *ŝajn-is ebl-i vid-i la plej et-a-j-n detal-o-j-n*  
 やうだ-V.PST.IND 可-V.INF 見-V.INF DEF SUP 小-ADJ-PL-ACC 詳-N-PL-ACC  
*en la dekoraci-o de la preĝ-ej-o-j kaj dom-o-j.*  
 in DEF 飾-N.SG of DEF 祈-所-N-PL and 家-N-PL

... 教會や家々の裝飾の最も細かなところまで見ることができるやうだつた。

— TE, *Vojaĝimpresoj*, Langlet/Luin, 1895 (2003)

コーパスで形態素 ebl を含む語がどのやうな品詞語尾を伴つて現はれてゐるか調べると、形容詞形で現はれる割合は増減してゐないやうであるが、動詞形で現はれる割合が増えてきてゐることが分かり、それと連動してゐるのか副詞形で現はれる割合が減つてゐることも分かる。形態素 ebl を含む語が動詞形、副詞形、形容詞形で現はれた割合を年代別に追つたグラフが圖 7 である。

形態素 ebl を語幹最終要素とする語の生起頻度を 100 とした場合の動詞形、コピュラ動詞に隣接する副詞形、コピュラ動詞に隣接する形容詞形の生起頻度の割合を百分率で示したものが圖 8 である。おほむねコピュラ動詞に隣接する副詞形・形容詞形が代置される形で動詞形の使用が伸張していつたであらうことを示唆してゐるやうでもあるが、neces-(必要)におけるほど(圖 6)はつきりとしてはゐない。このあと論じる通り、形態素 ebl と動詞活用の増加の要因については單純な解釋を許さない狀況もある。

検索の性質上、コピュラ動詞に隣接する副詞形や形容詞形は、必ずしもコピュラ動詞とともに述語を構成するものだけではなかつたことも示しておきたい。次の (15a) は「目に見えて... 不幸」、(15b) は「明らかな兆し」がまとまりをなすのであつて、コピュラ動詞と

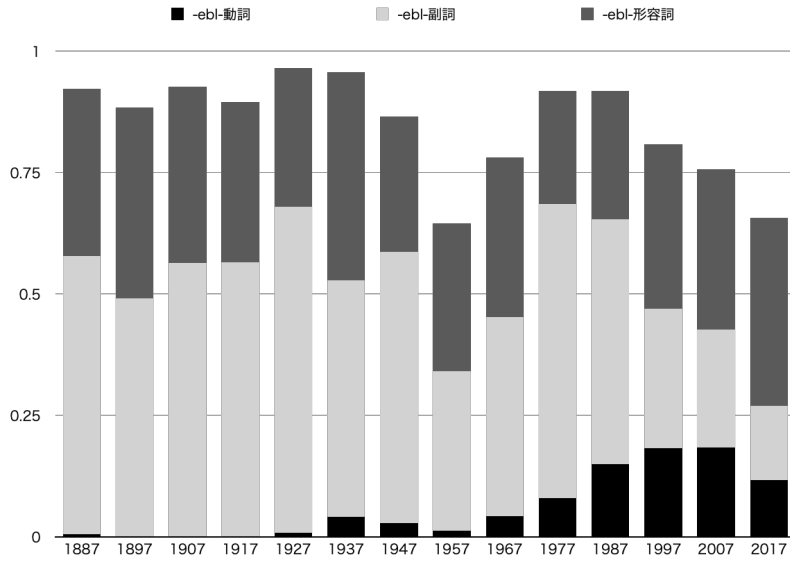


圖 7 形態素 ebl を含む語が動詞形、副詞形、形容詞形で現はれた割合

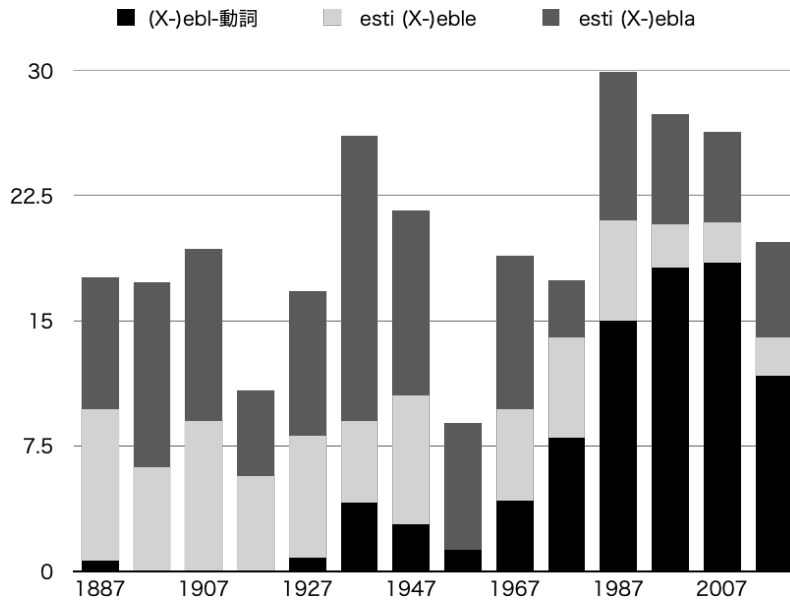


圖 8 形態素 ebl を含む語のうち動詞形、コピュラ動詞隣接副詞形、同形容詞形の割合

ともに一つの構成素をなすものではない。集計にはこのような例も数へられてゐるが、それほど多くはないやうであつた。

- (15) a. ... *ši est-as vid-ebl-e ia mal-feliĉ-a vir-in-o:*  
 3.SG.F COP-V.PRES.IND 見-可-ADV ある種.ADJ.SG 非-幸-ADJ.SG 男-女-N.SG  
 ...  
 ... 彼女は目に見えて、ある種の不幸な女である...

— TE, *Marta*, Zamenhof, 1910

b. ... *est-as*                    *vid-eb1-a*        *sign-o*    *por tio*, ...  
 COP-V.PRES.IND 見-可-ADJ.SG 兆-N.SG for それ

... それに対する明らかな兆しがある/それに対する兆しは明らかだ...

— TE, *Artikoloj el Monato*, diversaj personoj, 1997-2003

また、語幹 ebl-(可能) が単獨で副詞語尾を伴ふ場合は、eble 「もしかすると」といふ意味で用ゐられるケースが非常に多かつたが、これは形容詞形 ebla 「可能な」に對應する交替副詞形にはあたらない。この意味の eble がコピュラ動詞に隣接してゐた例を示しておく。

(16) *Mi est-as*                    *ebl-e*                    *la plej mal-bon-a*    *mar-ist-o*    *en*  
 1.SG COP-V.PRES.IND もしかすると-ADV DEF SUP 非-良-ADJ.SG 海-者-N.SG in  
*la mond-o...*  
 DEF 世-N.SG

私はもしかすると世界で最も悪い船乗りかもしれない。

— TE, *Kompatinda Klem*, John Merchant., 1931

このほか、形容詞 *kompre-n-eb1-a*(理解-可-ADJ.SG) 「理解可能な」に對應する副詞形 *kompre-n-eb1-e* も、多くが「當然」の意味で使はれてをり、文法的な交替には關はらないものであつた。

形態素 ebl を最終要素とする語形にどのやうなものが見られるのか、形容詞形と副詞形について、コーパスで頻度の高かつた順にリストしたものが表 2 と表 3 である。

表 2 頻度の高い X-eb1a

表 3 頻度の高い X-eb1e

1144	ebl-a	可能な	7959	ebl-e	もしかすると、可能
610	vid-eb1-a	目に見える	2470	kompre-n-eb1-e	當然、理解可能
298	dispon-eb1-a	自由に使へる	688	kred-eb1-e	たぶん、信じうる
294	kompre-n-eb1-a	理解可能な	519	vid-eb1-e	見に見えて
282	ne-evit-eb1-a	不可避の	305	supoz-eb1-e	たぶん、假定しうる
241	ne-vid-eb1-a	目に見えない	278	esper-eb1-e	希望的觀測では
223	kompar-eb1-a	比較・匹敵しうる	255	ne-eb1-e	不可能
218	ne-kompre-n-eb1-a	理解不可能な	242	laŭ-eb1-e	できるだけ
218	akcept-eb1-a	受け入れられる	194	ne-evit-eb1-e	不可避的に
217	ne-eb1-a	不可能な	158	ne-kred-eb1-e	信じがたく
184	ne-kred-eb1-a	信じがたい	110	mem-kompre-n-eb1-e	自明のやうに
177	trov-eb1-a	見つけられる	48	ne-imag-eb1-e	想像を絶する程

形態素 ebl を最終要素とする語形を見ると、形容詞も副詞も自立語 ebla, eble の使用が高頻度であることが分かるが、そのほかの場合は必ずしも同形の語幹が形容詞形と副詞形とで同様の頻度で現はれてゐないことが分かる。

これらに對して、形態素 ebl を最終要素とする動詞語形を頻度の高い順にリストした表 4 を比べても、ほとんど同じことが言へる。つまり、自立語 ebli の頻度が高く、そのほかの語幹は形容詞形や副詞形で見られなかつたものを含む。動詞形の場合は、目立つて否定の ne- の接頭例の頻度が低かつた。逆に言へば、形容詞形や副詞形の場合は、その品詞性のために ne- が接頭されてゐる場合が含まれると見ることができる。

表 4 頻度の高い X-ebli

2695	ebl-i	可能だ
449	vid-ebli	見える
221	trov-ebli	見つけられる
126	hav-ebli	入手可能だ
117	leg-ebli	讀める
103	dispon-ebli	自由に使へる
68	mal-ebli	不可能だ
64	konstat-ebli	確認できる
59	uz-ebli	使へる
56	sent-ebli	感じられる
56	aŭd-ebli	聞こえる
51	kompren-ebli	分かる

以上からすれば、形態素 ebl を最終要素とする語幹の動詞活用が起こる動機は neces- (必要) などの單純形容詞と全く同じ仕組ではないのかもしれない。ひよつとすると、副詞形 eble 「もしかすると、可能」、kompreneble 「當然、理解可能」などの示す多義性の解消のために ebli 「可能だ」、komprenebli 「理解可能」が使はれるといふやうな、形態素 ebl 特有の事情の方が強くはたらいてゐるのかもしれない。

## 5 分詞語幹の動詞活用

Haspelmath (1994) は表 5 のやうな例を示して、エスペラントでは能動分詞と受動分詞の諸時制が完全に對稱的であり、さらには分詞の時制形態素は定動詞のものとも同じだが、自然言語にはこのやうな特徴は見られないとしてゐる。

表 5 skribi 「書く」の分詞形容詞形と定動詞の諸時制

	能動	受動	定動詞
現在	skrib-a-nta	skrib-a-ta	skrib-a-s
過去	skrib-i-nta	skrib-i-ta	skrib-i-s
未來	skrib-o-nta	skrib-o-ta	skrib-o-s

Haspelmath (1994) が指摘する通り、エスペラントの分詞諸時制は對稱的に設計されて



みるが、実際の運用は対稱的ではない。まず、受動分詞は過去時制で現はれることが多く (圖 9)、能動分詞は現在時制で現はれることが多い (圖 10)。そして、ともに未來時制で現はれることは少ない。

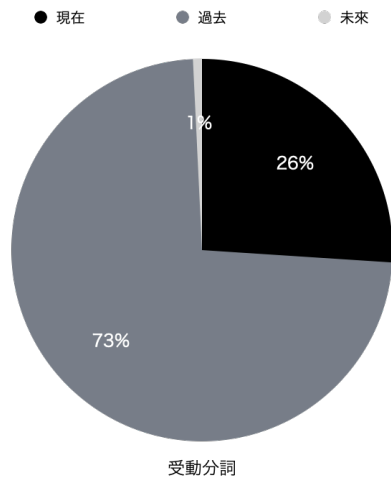


圖 9 受動分詞の諸時制生起率

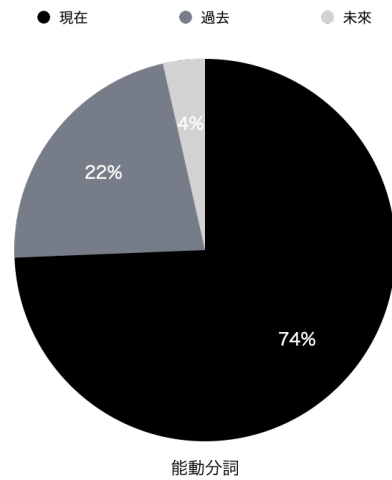


圖 10 能動分詞の諸時制生起率

のみならず、受動分詞は形容詞形で現はれることが多く (圖 11)、能動分詞は生起頻度のそれなりにあるものを辿れば副詞形、形容詞形、名詞形が張り合つた頻度で使はれる (圖 12)。そして、ともに動詞形で現はれることは少ない。

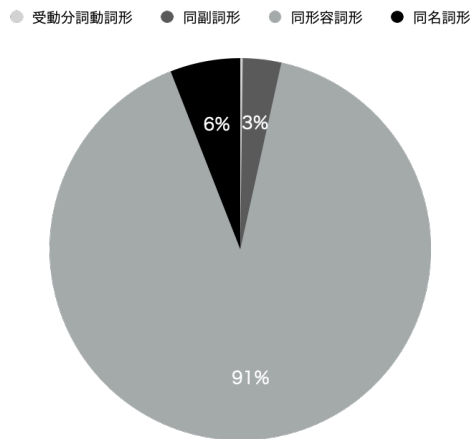


圖 11 受動分詞の諸品詞形生起率

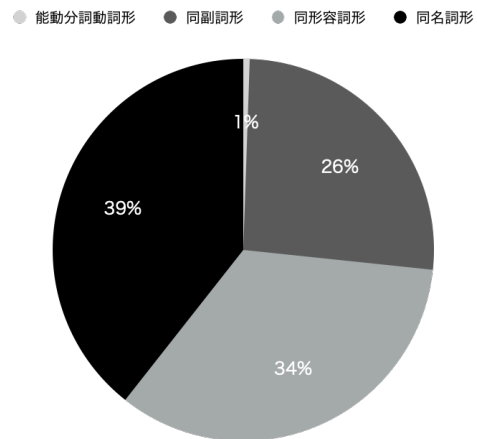


圖 12 能動分詞の諸品詞形生起率

實際の用例に即して見れば、次の (17) では受動分詞が 4 回出現するが、そのうち全てが形容詞形で現はれ、また 3 回は過去形、1 回は現在形である点で、全般的な傾向に沿つてゐる。そして、最初の例は名詞を修飾してゐるが、あとの 3 回は形容詞形受動分詞にコンピュータ動詞が隣接して述語を構成するものである。

- (17) *La du nun for-ig-it-a-j* *afiš-o-j* *est-is*  
 DEF 二 今 away-CAUS-PST.PASS.PTCP-ADJ-PL 投稿記事-N-PL COP-V.PST.IND  
*publik-ig-it-a-j* *en la Forum-o* *de UEA la*  
 公-CAUS-PST.PASS.PTCP-ADJ-PL in DEF フォーラム-N.SG of UEA DEF  
*24-a-n* *de februar-o kaj la 2-a-n* *de mart-o.*  
 二十四-ADJ.SG-ACC of 二月-N.SG and DEF 二-ADJ.SG-ACC of 三月-N.SG  
*Ambaŭ est-is* *verk-it-a-j* *de Alexander Gofen,*  
 兩.PL COP-V.PST.IND 著-PST.PASS.PTCP-ADJ-PL by PN PN,  
*dum-viv-a membr-o de UEA, kiu jam de jar-o-j est-as*  
 終-生-ADJ.SG 會員-N.SG of UEA REL.SG 已 since 年-N-PL COP-V.PRES.IND  
*kon-at-a* *pro sia-j* *specif-a-j* *opini-o-j.*  
 知-PRES.PASS.PTCP-ADJ.SG 因 RFL.ADJ-PL 特有-ADJ-PL 見解-N-PL

2月24日及び3月2日に、今は削除された二つの書き込みがUEAの「フォーラム」に公開された。ともに、何年も前からその特異な意見のため知られてゐるUEAの終身會員のAlexander Gofenによつて執筆されたものである。

— 2021-03-23 *libera folio* <https://www.liberafolio.org/2021/03/23/rasismaj-afisoj-en-retejo-de-uea/> accessed 2021-04-02

上の例はインターネット掲示板への人種差別書込事件を傳へるものであるが、通報されて削除されるまでの間に閲覧が一定数あつたといふ話が續く。讀者コメント欄で閲覧はロボットによるものかについて應酬があつた。その中から次の例を擧げる。

- (18) *Ali-flank-e ekzempl-e mi leg-is* *la afiš-o-j-n,* *ne*  
 他-方-ADV 例-ADV 1.SG 讀-V.PST.IND DEF 投稿記事-N-PL-ACC NEG  
*est-ant-e* *en-salut-int-a* *membr-o,* *do ĉu*  
 COP-PRES.ACT.PTCP-ADV in-挨拶-PST.ACT.PTCP-ADJ.SG 會員-N.SG では Q  
*ne ebl-as,* *ke la ali-a-j leg-int-o-j* *sam-e ne*  
 NEG 可-V.PRES.IND COMP DEF 別-ADJ-PL 讀-PST.PTCP-N-PL 同-ADV NEG  
*est-is* *en-salut-int-a-j,* *sed ja est-is* *hom-o-j?*  
 COP-V.PST.IND in-挨拶-PST.ACT.PTCP-ADJ-PL 但 實 COP-V.PST.IND 人-N-PL

他方で、私だつてログインずみの會員でないまま書き込みを讀んだことがあるけど、それなら他の讀んだ人たちも同じやうにログインした状態でなかつただけで、實際(ロボットでなく)人間だつた可能性はない?

— 2021-03-23 *libera folio* (コメント欄の應酬より) <https://www.liberafolio.org/2021/03/23/rasismaj-afisoj-en-retejo-de-uea/> accessed 2021-04-02

(18)には能動分詞がいくつか出現する。最初の例は形容詞形で次の名詞を修飾してをり、次の例は名詞形、最後の例はコピュラ動詞を伴つて述語を構成してゐる。

分詞語幹と動詞語尾の結合は極めて限定的で、能動分詞の場合は過去能動分詞の動詞形假定法 (-int-us)、受動分詞の場合は現在受動分詞の動詞形現在直説法 (-at-as) が、いくつかの語幹に限って定着をしてみるとまとめることができるが、詳細については能動と受動に分けて以下で見ることにしたい。

### 5.1 能動分詞語幹

コピュラ動詞と能動分詞形容詞形を組み合わせた合成述語は、先に (18) で見た例のうち (19a) に再掲する部分と対応する単純過去文の (19b) との比較で明らかかなやうに、潜在的には細かい時間関係を表現しうるが、このような複合形式が生起する頻度は低い。

- (19) a. *ne est-is en-salut-int-a-j*  
 NEG COP-V.PST.IND in-挨拶-PST.ACT.PCTP-ADJ-PL  
 ログインしてゐなかつた
- b. *ne en-salut-is*  
 NEG in-挨拶-V.PST.IND  
 ログインしなかつた

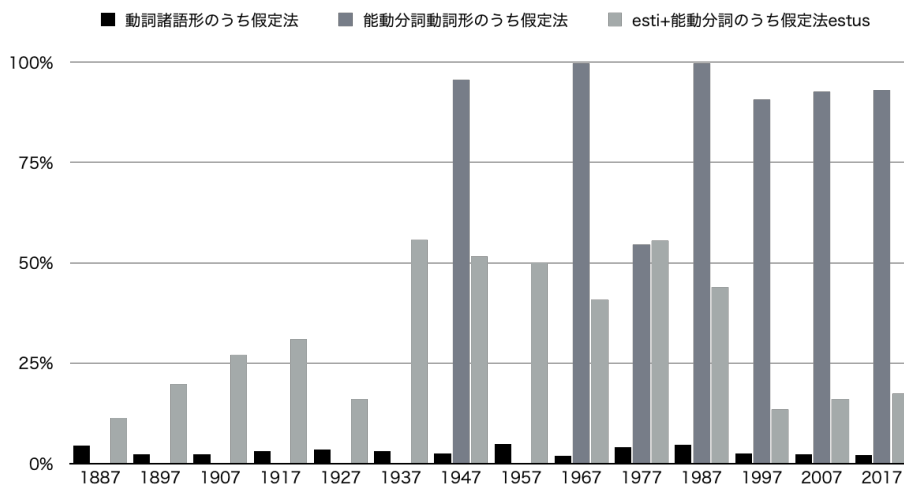


圖 13 假定法の使用率、全動詞、能動分詞動詞形、esti が隣接する能動分詞形容詞形・副詞形

能動分詞語幹の動詞活用はさらに頻度が低く能動分詞語幹の動詞活用のほとんどが過去分詞語幹に假定法語尾がついたものである。この形式は、普通の假定法に加へてもう一つの假定法系列を生み出す手段として發達してきた可能性をある程度見ることができる。圖 13 に示したやうに、能動分詞語幹假定法の形式がコーパスに現はれる 1940 年代以來、能動分詞動詞形のほとんどが一貫して假定法で現はれる一方、動詞語形全體に占める假定法の割合は低く、時代差も大きくないことがその根拠となる。

Kolker (1985: 97) は「法の範疇に関しては、エスペラントの接續法 (引用者註: 本稿の

「假定法」) に時制諸形式がないといふ點で、ロシア語からの影響はあきらかである」と指摘してゐる。エスペラントの形態法のは、設計上、また従つてパラダイムとしてはたしかに一つの假定法しかない。ところが、ここで取り扱ふ能動分詞動詞形は過去の假定法を表はすためのもので、例へば (20a) のやうに現はれる。(20a) はフランス語記事 (20b) の翻譯であり、過去假定法の表現意圖はその對應からも明確である。

- (20) a. 886.202 *mort-o-j pov-int-us* *est-i* *evit-it-a-j*  
 886,202 死-N-PL 可能-PST.ACT.PTCP-SUBJ COP-V.INF 避-PST.PASS.PTCP-ADJ-PL  
*inter 1991 kaj 2000, se oni sukces-us egal-ig-i la*  
 間 1991 and 2000 若 INDEF.SG 成功-SUBJ 等-CAUS-V.INF DEF  
*mort-o-nombr-o-j-n inter blank-a-j kaj nigr-a-j uson-an-o-j.*  
 死-N-數-N-PL-ACC 間 白-ADJ-PL and 黒-ADJ-PL 米國-人-N-PL

(平均壽命に 16 歳の差がある) アメリカの白人と黒人の死亡數を同等化することができたとすれば、1991 年から 2000 年の間、886,202 の死が避けられえたことになる。

— TE, *Le Monde diplomatique en Esperanto 2008-2010*, diversaj personoj, 2008-2010

- b. 886 202 morts auraient pu être évitées entre 1991 et 2000, si l'on avait égalisé les taux de mortalité entre les Américains blancs et les Afro-Américains[.] <https://www.monde-diplomatique.fr/2010/02/BULARD/18797> accessed 2020-04-02

表 6 はコーパスに現はれる能動分詞動詞形の頻度の高い順にリストした上位の語形である。動詞語尾のついた能動分詞語幹のうち頻度の高いものは全て過去假定法である。頻度

表 6 頻度順 能動分詞語幹 + 動詞語尾

181	pov-int-us	できる (助動詞)
95	dev-int-us	すべきだ、するはずだ (助動詞)
77	est-int-us	である、存在する
18	far-int-us	する、作る
15	okaz-int-us	起こる
12	hav-int-us	もつ
8	far-ig-int-us	なる
7	prefer-int-us	好む
7	dir-int-us	言ふ
6	neces-int-us	必要
6	ebl-ig-int-us	可能にする
6	don-int-us	與へる

が高いといつても生起数は一般語彙より少なく、また特定の語彙に偏つてこの形式が使はれることが明らかである\*11。

一般に、頻度の低い文法形態素の組み合わせを検索する際、TE の形態素解析が誤つてゐるものが結果に混入することが多い。能動分詞語幹 + 動詞語尾の検索結果については次の表 7 と表 8 に示す通り、過去能動分詞語幹 (X-int) に假定法語尾 (-us) が組み合わせさつたもの以外は形態素解析の信頼度がかなり落ちる。

表 7 能動分詞動詞形、能動分詞形成接尾辭の種類別頻度

	-int+ 動詞語尾	-ant+ 動詞語尾	-ont+ 動詞語尾
検索結果	660	22	22
データの誤り	不明	7	15

表 8 能動分詞動詞形、語尾の種類別頻度

	能動分詞語幹 +is	+as	+os	+us	+u	+i
検索結果	13	21	10	644	0	16
データの誤り	3	6	2	不明	0	12

## 5.2 受動分詞語幹

受動分詞について使用するコーパス検索結果も、頻度が 100 を下回つた検索結果について目視で誤りを確認した。

表 9 受動分詞動詞形、受動分詞形成接尾辭の種類別頻度

	-it+ 動詞語尾	-at+ 動詞語尾	-ot+ 動詞語尾
検索結果	100	170	11
データの誤り	67	不明	8

表 10 受動分詞動詞形、語尾の種類別頻度

	受動分詞語幹 +is	+as	+os	+us	+u	+i
検索結果	48	173	10	4	7	39
データの誤り	40	不明	5	4	3	35

表 9、表 10 からも見取れるやうに、受動分詞語幹が動詞活用する場合は、現在受動分

\*11 表 6 に現はれる語形のうち neces-int-us は形容詞語幹 neces- を分詞形で用ゐる時點で動詞化を経てゐるので、形容詞語幹の動詞的振舞を二度示してゐることになる。

詞語幹 (X-at-) に現在直説法語尾 (-as) が連なる形式がほとんどであり、これは受動分詞語幹の動詞形を頻度の高い順にリストした表 11 から明らかである。

表 11 頻度順 受動分詞語幹 + 動詞語尾

40	bezon-at-	必要とされてゐる
15	uz-at-	使はれてゐる
8	kon-at-	(経験して) 知られてゐる
6	permes-at-	許されてゐる
4	plan-at-	計画されてゐる
4	konstru-at-	建築されてゐる
3	parol-at-	話されてゐる
3	mal-permes-at-	禁じられてゐる
3	konsider-at-	考へられてゐる
3	dezir-at-	望まれてゐる

語彙的な偏りも見られ、この文法形式 (-at-as) が急に一般的に使はれるやうになつたのではなく、特定語彙の表現形式として行なはれるやうになつてきたことが分かる。代表的な例を (21) に挙げる。

- (21) *Nun-temp-e por ret-poŝt-o ne bezon-at-as*  
 今-時-ADV for ネット-郵便-N.SG NEG 要-PRES.PASS.PTCP-V.PRES.IND  
*poŝt-mark-o-j.*  
 郵便-標-N-PL

現在 e-mail のために郵便切手は要らない (要されない)。

— TE, *Artikoloj el Monato*, diversaj personoj, 1997-2003

グラボフスキ語法として Kalocsay (1970) が挙げる「分詞の直接的動詞化」の例は受動分詞語幹が動詞活用するものばかりだが、その中に *laŭd-at-u* (讚-PRES.PASS.PTCP-V.IMP) 「褒めたたへられよ」があつた。バチカンのラジオ放送はラテン語で *Laudetur Jesus Christus* と挨拶し、それを放送言語に譯してから内容に移ることが多い。エスペラントでは (22) が對應する表現である。

- (22) *Est-u laŭd-at-a Jesu-o Krist-o*  
 COP-V.IMP 讚-PRES.PASS.PTCP-ADJ.SG イエス-N.SG キリスト-N.SG

イエス・キリストが褒めたたへられんことを。

— [https://media.vaticannews.va/media/audio/program/357/esperanto\\_1\\_240321.mp3](https://media.vaticannews.va/media/audio/program/357/esperanto_1_240321.mp3) accessed 2021-03-31

ラテン語接續法が機能的にはエスペラントの命令法に一部対応することを踏まへれば、ラテン語 *laudetur* は形態的にはエスペラントの *laŭdatu* に事実上平行する表現である。しかし、エスペラント放送ではコンピュータ動詞を命令法に活用させて、受動分詞形容詞形を後續させる形で対応表現を作つてゐる。

ザメンホフはエスペラントの個々の表現についてさまざまな意見を表明してきた。受動分詞の動詞活用については次のような発言がある。

- (23) ザメンホフ (1929: 53): 「“estas amata” “estas amita” 等の代用としての “amatas” “amitas” 等の形は夫自身我々の言語に何等の破壊をも齎らしません。それでもし言語委員会が之を是認しようとするならばそれを使用してもいいでせう [。] 併し若し単に作家が自分自身進んで眞先にこの形を用ひようとならば私はそれをお勧めできません。一般作家がこの新しい形を採用できるのは單に “as” “is” 等が “estas” “estis” 等の意味をもつ場合のみに採用し得るわけでありませう。併しながら多分早晩は動詞の語尾が動詞 “esti” の意味を持つようになりませうがそれにしても今日迄はまだその意味はもつてゐないのです。」

ザメンホフは分詞の動詞活用は「基礎」の「文法」の枠内にをさまる現象だと捉へる一方、新奇な表現だとも感じたに違ひない。そして、この表現が使用者たちにとって定着した慣用ではないことを重視した意見を述べてゐる。現在に至つても、分詞の動詞活用は全般に語彙的な現象と考へるべきものに見える。受動分詞は形容詞形でコンピュータ動詞とともに述語を構成する割合が高いことを考へると、動詞活用しにくい原因は複雑な時間関係を一語で表現する難しさに残されるのかもしれない。

## 6 をはりに

本稿ではエスペラントにおける形容詞語幹の動詞活用について考察した。Necesa/necese(必要)の形容詞形・副詞形の使ひ分けが動詞形 *necesi* によつて回避されてゐるのならば形容詞語幹の動詞活用に關するいくつかのエスペラントの變化は脱スラブ化の傾向として説明が可能かもしれない。出動形容詞を派生する接尾辭-*ebi*の動詞活用の動機などはそのやうな單純化を容易に許さないが、過去の假定法のために過去能動分詞の動詞活用が利用されてゐることは明らかであり、これもロシア語的な時制のない假定法が設計されたエスペラントが非スラブ的な動きを見せてゐるものと捉へることができなくもない。本稿冒頭に比較した-*ad*-派生形の動詞活用も、Kolker (1985: 96-97) によればスラブ的な不完了體の派生をねらつた「繼續性標示」であつたが、その機能は近年稀薄になりつつあり、結果としては本稿で取り上げた現象群はエスペラントのスラブ性からの脱却とも見える。

しかし、計劃言語ヴォラピュク擁護論でも知られるシューハルトの言葉をもつて、戒めとしたい。

- (24) 「言語の時期はどれもこれも過渡期であつて、一が正常ならば他も亦さうであり、全體に妥當することは亦部分にも妥當する。自分は言語をば完成せる音韻法則と未完

成のそれとの併立の如く考へるわけにはいかない。それは自然的考察に目的論的表象を混入することだといつてもよからう。若し自分が過渡期を説くことがあつたとしても、それはたゞ相對的の意味に於てであり、後に至つて既に確定した事實に關する場合に限るのであつて、何にまれ現在の事態を過渡期と稱する権利は我々にはないのである。」(シュツハルト 1935)

本稿で扱つた現象を「形容詞の直接的動詞化」などの一言でまとめた場合、それぞれの變化の動機はつかみづらい。また、グラボフスキがこれらの表現の可能性を最初期に示したのは確かだが、その語法がそのまま使用者に受け入れられたわけではない。-ebl-の動詞活用が増えた背景には eble 「もしかすると」などの副詞形の意味的な分化とその明確化がありさうである。能動分詞語幹の動詞活用が現はれた背景に過去假定法 (-int-us) の表現欲求が關はつてゐるのは確かである。ただ、-int-us 形の頻度は高いとはいへず、まだ翻譯文體に近い可能性もある。受動分詞語幹は、述語用法の割合が高いにもかかわらず動詞活用が増えてゐないことが特異である。これらについては、僅かに -at-as の形式がいくつかの語幹で接續例をもつのみであり、その點で他の形容詞語幹の動詞活用とは一線を劃す。

エスペラントのコーパス TE の作者 Wennergren は、インタビューに答へる中で、次のやうに發言してゐる。

- (25) もちろん、現在の内容は眞に學術的に使用可能なコーパスとしてはやや小さいのですが、Tekstaro の使用者は概して非常に肯定的に反應してくれてゐます。少なくとも 1000 萬語は本來なければなりません。

— Camacho kaj Zamenhof kunloĝas en Tekstaro de Esperanto de Redakcio — Laste modifita: 2008-03-09 18:04 <https://www.liberafolio.org/arkivo/www.liberafolio.org/2008/tekstarodeesperanto/>

2022 年 3 月 13 日現在、<https://tekstaro.com/tekstaro.html> ではコーパスの語数が 10,470,329 に達してゐると述べてゐる。作者の考へた最小限の規模に達したわけである。一方で、本稿で述べたやうに、TE には文章それぞれの發表年代が機械的に特定できるやうにタグ付けされてない、形態素解析に機械處理による明らかな誤りがあるなどの問題があるほか、翻譯作品の原著言語別特徴を調べたり話者の母語別の言語特徴を調べたりすることが可能になるにはさらなるデータ収集が望ましい状況にあり、これらは大きな課題として残つてゐると考へる。接觸言語としてのエスペラントの特徴を調査するためのツールとしては TE はまだ發展途上にある。しかし、パプア諸語とも向き合ふ研究者として見れば、これだけの規模の歴史コーパスをもつ言語は世界で非常に稀でもある。

言語學者は計劃言語について「設計」への興味を示してきた。イエスペルセンが自身の計劃言語を設計したのが典型的であるが、Sapir et al. (1925); Trubetzkoy (1939) が學習容易で中立的な設計について提言してゐるのも同じ關心からのものである。現在では設計に積極的に關與する言語學者は少ないが、特定の計劃言語としてのエスペラントの類型特徴に對する研究 (Leskien 1907; Haspelmath 1994; Comrie 1996; Tida 2008) も主に言語の設計面からなされてゐるといふことができる。しかも、それらの類型特徴に、ある種の評價



が加えられることも多い。一方で、「實態」への興味はエスペラントに関しては、エスペラント界の中から主に専門言語学者でない立場から現はれてきたやうに思はれる (ザメンホフ 1929; Piron 1977; 臼井 2002; Jansen 2008)。エスペラントについては、アマチュアが職業言語学者の水準を上回る成果をあげてみるのである。エスペラントが計画言語である以上、その規範的側面に注目が集まるのは避けがたいとはいへ、言語學の本務が規範でなく記述にある (Jespersen 1933: 19–20) のだとすれば、ゆゆしき事態ではなからうか。

エスペラント研究が一般言語學に資するところも多い。一例を挙げれば、Tida (2021a) で指摘したやうに、Bally (1944) や Bolinger (1967) よりも早く、de Saussure (1915) や Kalocsay and Waringhien (1938) が関係形容詞の性質に気づいてゐた。

エスペラントに関する記述的言語研究は成り立たないとする見方が、エスペランティストからも示されることがある (cf. Miner 2010)。三省堂『言語学大辞典』言語編に「エスペラント」の項目がないのも同様の考へ方に従ふものであらうか。エスペラントがその設計のみで語り盡くされうるものと誤解されてゐるのでなければ、このやうな態度は、非母語話者共同體の多様性ゆゑの不信、逆にいへば話者共同體の均質性への過信 (cf. 千田 2021b, 2022) に基づくものであらう。たしかにエスペラント共同體は大きな多様性を抱へてゐる。ザメンホフ的な精神からはありえないやうな考へ方をする者がこの共同體内に存在するほどである。言語學は言語を語る言葉を提供するものである。エスペラントの言語的側面を取り扱ふことばが言語學以外でありえようか。

言語學においては話者社會の均質性を假定して記述對象を理想化することが避けられない場合も多いかもしれない。しかし、それが理想化にすぎないことに意識的である必要がある。話者社會の均質性の假定は、言語の静止状態の假定とともに、フェルディナン・ド・ソシュールが言語學にもたらしたものと見られることが多く、社會言語學的な觀點から斷罪されることもある (cf. Schlieben-Lange 1973: 29)。そのフェルディナンですらエスペラントが「言語」としての宿命である「進化」に従ふことを豫測したことに、ひとときは興味を惹かれる。

## 略號

ACC	accusative	NEG	negative
ACNNR	action nominalizer	PASS	passive
ACT	active	PIV	Plena Ilustrita Vortaro
ADJ	adjective	PL	plural
ADV	adverb	PN	personal name
CAUS	causative	PRES	present
COP	copula	PST	past
COR	correlative	Q	question
DEF	definite	REL	relative
F	female	RFL	reflexive
IND	indicative	SG	singular
INDEF	indefinite	SUBJ	subjunctive
INF	infinitive	TE	Tekstaro de Esperanto
N	noun	V	verb

## 参考文献

- 安達信明 (1984) 「エスペラントには文字にあらわれないもう 1 つの音素がかくれている」『エスペラント La Revuo Orienta』52 (2)、6–9.
- Bally, Charles (1944) *Linguistique générale et linguistique française*. Berne: Francke, seconde édition.
- Bolinger, Dwight (1967) Adjectives in English: Attribution and Predication. *Lingua* 18, 1–34.
- Comrie, Bernard (1996) Natural and Artificial International Languages — a Typosogist’s Assessment. *Journal of Universal Language* 1(1), 35–55.
- Corsetti, Renato, Maria Antonietta Pinto, and Maria Tolomeo (2004) Regularizing the regular: The phenomenon of overregularization in Esperanto-speaking children. *Language Problems & Language Planning* 28(3), 261–282.
- Dietterle, Joh ed. (1929) *L. L. Zamenhof, Originala Verkaro: Antaŭparoloj, Gazetartikoloj, Traktaĵoj, Paroladoj, Leteroj, Poemoj*. Leipzig: Hirt & Sohn.
- Gledhill, Christopher (1998) *The Grammar of Esperanto: A Corpus-based description*. München: Lincom Europa.
- 後藤齊 (1987) 「エスペラントとヨーロッパ諸語の類似について」『エスペラント La Revuo Orienta』55 (9)、7–8、URL: <https://www.sal.tohoku.ac.jp/~gothit/ro8709.html>.
- Haspelmath, Martin (1994) Passive participles across languages. In Fox, Barbara and

- Paul J. Hopper eds. *Voice: form and function*. 151–177, Amsterdam/Philadelphia: Benjamins.
- Jansen, Wim (2008) *Naturaj vortordoj en Esperanto*. Rotterdam: Universala Esperanto-Asocio.
- Jespersen, Otto (1933) *Linguistica : selected papers in English, French and German*. Copenhagen: Levin & Munksgaard, George Allen & Unwin.
- Kalocsay, K. (1970) *Lingvo, stilo, formo: Studoj*. Oosaka: Pirato, tria, parte tralaborita.
- Kalocsay, K. and G. Waringhien (1938) *Plena Gramatiko de Esperanto*. Budapest: Literatura Mondo, II. tralaborita.
- Kökény, Lajos and Vilmos Bleier eds. (1933) *Enciklopedio de Esperanto*. Budapest: Literatura Mondo.
- Kolker, Boris Grigor'evič (1985) Vklad ruskogo jazyka v formirovanie i razvitie esperanto. Doctoral dissertation, Akademija nauk SSSR.
- Künzli, Andy (2001) René de Saussure (1868–1943) – tragika sed grava esperantologo kaj interlingvisto el Svislando. In Fiedler, Sabine and Haitao Liu eds. *Studoj pri interlingvistiko/Studien zur Interlinguistik*. 234–257, Dobřichovice: Kava-Pech.
- Leskien, A. (1907) Zur Kritik des Esperanto. In Brugmann, K. & A. Leskien ed. *Zur Kritik der künstlichen Weltsprachen*. Chap. I, 5–29, Straßburg: Trübner.
- Miner, Ken (2010) La neebleco de priesperanta lingvoscienco. In Blanke, Detlev and Ulrich Lins eds. *La arto labori kune: Festlibro por Humphrey Tonkin*. 259–270, Rotterdam: Universala Esperanto-Asocio.
- van Oostendorp, Marc (1999) Syllable structure in Esperanto as an instantiation of universal phonology. *Esperantologio* 1, 52–80.
- Piron, Claude (1977) *Esperanto: Ĉu eŭropa aŭ azia lingvo?*. Rotterdam: Universala Esperanto-Asocio.
- Privat, Edmond (1927) *Historio de la Lingvo Esperanto: 1887–1927*. Hago: Internacia Esperanto-Instituto.
- Sapir, Edward, Leonard Bloomfield, Franz Boas, John L. Gerig, and George Philip Krapp (1925) Memorandum on the Problem of an International Auxiliary Language. *Romanic Review* 16, 244–256.
- 佐々木嗣也 (2009) 「エスペラントのユダヤ的背景」木村護郎クリストフ・渡辺克義 (編) 『媒介言語論を学ぶ人のために』、第 14 章、297–311、京都: 世界思想社.
- Saunders, G. (1988) *Bilingual Children: From Birth to Teens*. Clevedon: Multilingual Matters.
- ド・ソッスユール, フェルディナン (1928) 『言語學原論』、小林英夫訳、東京: 岡書院.
- de Saussure, René (1915) *Fundamentaj Reguloj de la Vort-teorio en Esperanto*. Berno: Lingvo Komitato, (Fotorepreso, 1969, Saarbrücken: Artur Iltis).
- Schlieben-Lange, Brigitte (1973) *Soziolinguistik — Eine Einführung*. Stuttgart: W. Kohlhammer GmbH, zweite, überarbeitete und erweiterte Auflage, (原聖・糟谷啓介・

- 李守訳, 『社会言語学の方法』, 東京: 三元社, 1990年) .
- シュツハルト, フーゴー (1935) 「音韻法則について少壯文法學派を駁す」『方言』5 (7)、466–496、(林長男譯、Schuchardt, Hugo (1885) *Über die Lautgesetze – Gegen die Junggrammatiker* –, Berlin: Oppenheim.).
- 新村出 (1972) 「ドレスデン大会の思い出」『新村出全集第十四巻』、330–335、東京: 筑摩書房.
- Simons, Gary F. and Charles D. Fennig eds. (2018) *Ethnologue: Languages of the World*. Dallas, Texas: SIL International, twenty-first edition, Online version: <http://www.ethnologue.com>.
- Tida, Syuntarô (2008) Kial multas lokaj adpozicioj en Esperanto?: Komparo kun la japana, Tok-pisino, Dom kaj aliaj lingvoj. In Lins, Ulrich ed. *Aziaj kontribuoj al esperantologio: Aktoj de la 30-a Esperantologia Konferenco en la 92-a Universala Kongreso de Esperanto, Jokohamo 2007*. 20–32, Rotterdam: Universala Esperanto-Asocio.
- (2021a) Kial multas adjektivoj en Esperanto: Komparo kun la japana, Tokpisino, Dom kaj aliaj lingvoj. La 43-a Esperantologia Konferenco, 2021-07-22.
- 千田俊太郎 (2021b) 「計画言語とピジン・クレオール」『Language and Linguistics in Oceanina』13、16–31、URL: [https://izumi-syuppan.co.jp/web\\_LL0/vol-13/](https://izumi-syuppan.co.jp/web_LL0/vol-13/).
- (2022) 「言語の壁を超えた言語の発展」『エスペラント La Revuo Orienta』90 (2)、9–13.
- Trubetzkoy, N. S. (1939) Wie soll das Lautsystem einer künstlichen internationalen Hilfssprache beschaffen sein? *Travaux du Cercle linguistique de Prague* 8, 5–21.
- 白井裕之 (2002) 「非母語話者に許された自由～エスペラントにおける「国名問題」の考察～」修士論文, 青山学院大学.
- Wandel, Amri (2015) How Many People Speak Esperanto? Or: Esperanto on the Web. *Interdisciplinary Description of Complex Systems* 13(2), 318–321.
- 早稲田みか (1983) 「エスペラントの言語変化」『月刊言語』12 (10)、61–64.
- Wennergren, Bertilo (2020) Plena Manlibro de Esperanta Gramatiko. URL: <https://bertilow.com/pmeg/index.html>, Versio 15.2 de la 14-a de Novembro 2020.
- ザメンホフ L. L. (1929) 『リングワ`イ・レスポンドイ』、東京: 日本エスペラント學會、(岡本好次譯並増補、Zamenhof, L. L. (1910) *Lingvaj Respondoj*, Paris: Esperantista Centra Librejo).
- (1997) 『国際共通語の夢』、東京: 新泉社、(水野義明編訳).

(ちだしゅんたらう、京都大學大学院文學研究科)